



北海道科学大学まちかどキャンパスを開催!



このほか、札幌駅前地下歩行空間(チ・カ・ホ)や札幌モーターショー2020、函館蔦谷書店を会場に開催した同イベントでは、ものづくりなどを体験できる講座もを行い、子どもから大人まで楽しく学べるイベントとして大変好評を得ました。

2020年度も引き続き、多くの方にお楽しみいただけるイベントを企画しておりますので、皆さまお気軽にご参加ください!

※イベント開催予定については随時、本学ホームページ(<https://www.hus.ac.jp/>)などにてお知らせいたします。

学校法人北海道科学大学 ご寄付のお願い

学校法人北海道科学大学では、2024年に創立100周年を迎えるにあたり、充実した教育環境の維持と質の高い教育内容を永続的に提供するため財政基盤の充実を図るべく、寄付金の募集活動を推進しております。



1. 学生・生徒の自主活動支援寄付金
 2. +Professional奨学基金【就学支援金】寄付金
- 各寄付金の使途や募集要項などにつきましては、本法人ホームページ(<https://ed.hus.ac.jp/donation/>)をご確認ください。

読者アンケートにご協力お願いいたします

今後よりよい誌面づくりのため、ぜひ読者の方のご意見をお寄せください。アンケートは、本学ホームページのWEB回答フォームよりご回答ください。
※集計した回答は統計情報の作成及び広報誌制作における参考資料としてのみ利用し、回答者個人が特定されることはありません。

読者アンケート回答フォームURL ▶ <https://www.hus.ac.jp/info/enquete/>

NEWS LETTER

Vol.37 / 2019 No.3 2020年3月6日(第209号)

- 工学部
機械工学科 / 情報工学科 / 電気電子工学科
建築学科 / 都市環境学科
- 薬学部
薬学科
- 保健医療学部
看護学科 / 理学療法学科 / 義肢装具学科
臨床工学科 / 診療放射線学科
- 未来デザイン学部
メディアデザイン学科 / 人間社会学科
- 短期大学部
自動車工学科



Contents

- 01 特集1 +PIT
- 03 特集2 HUS密着レポート
- 05 研究室から
- 06 卒業生訪問
- 07 学科だより
- 09 活躍する学生たち
- 10 HUSキャンパスイルミネーション2019

あたらしい価値を創る

+PIT

北海道科学大学
組織横断型 活動推進プロジェクト

+PIT(プラスピット)とは?

北海道科学大学では、「北海道の発展・成長に最も貢献する大学」を目指し、学内の教職員を起点に学内外の人や企業、グループと連携し、新たなプロジェクトに取り組むチームを、大学が組織としてサポートする活動 = +PIT (+Professional Innovation Team) を2018年から行っており、現在19プロジェクトが進行中です。

► そのほかの進行プロジェクト

- ・T型フォード再生プロジェクト
- ・音によるエゾシカと車両の衝突回避のためのスピーカーシステム開発
- ・冬季における防災機能をもったキャンバスの構築 ほか全19プロジェクト

web site > www1.hus.ac.jp/~pluspit/

プロジェクト No.11

手稲の秋の新たな風物詩を目指して。 手稲歩く観光・教育研修ルート創造プロジェクト。



2019年
10月
「HUSpectacle -手稲行列-」
プレイベントを開催!

手稲山の標高1023mにちなんで10月23日に開催されたこのイベントは、大学から手稲山山頂までと、山頂で日没を眺めた

後に下山するまでの約20キロのコースを実際に歩くもので、学生や教職員約30名が参加しました。秋晴れに恵まれたこの日、一行は本学体育馆前から出発。途中、道尾先生の解説を挟みながら土功川の河川敷や手稲神社を巡り、手稲山を目指しました。手稲山の登頂は想像以上の勾配があり、険しい道が続きました。息を切らせながらも全員が山頂へとたどり着き、手稲山の頂では夕暮れに広がる雲海と札幌の夜景を臨むことができ、登頂の疲れをつかの間癒してくれました。その後、手稲登山道の入口まで下山し、解散式で一日を締めくくりました。



Chapter.2

プレイベントの振り返りと、改めて感じた学生への思い。

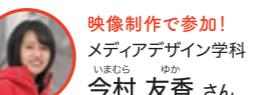
プレイベントの前に、学生たちと事前調査のため2月に雪中を歩く編、5月に新緑を歩く編として、8度ほど手稲区内を歩き、地域の資源の抽出と観光用の暫定ルートの選定を行いました。さまざまなルートが考えられる中、プレイベントでは大学から手稲山頂を目指す約20キロのコースに決定しました。

実は「20キロ」という距離には理由があり、災害発生時、帰宅距離が10キロ以内は全員「帰宅可能」、10キロを超えると「帰宅困難者」が現れ、20キロ以上は全員「帰宅困難」と言われています。20キロという距離を自分が歩けるかどうかは、災害時、帰宅困難にならないかどうかの分岐点でもあります。…しかし、イベント終了後のヒアリングで、かなりインパクトのあるチャレンジだったなと感じました。この経験を踏まえ、出発時間やゴール地点の設定など、見直すべき箇所も見え、大変意義のあるプレイベントとなりました。

個人的には、プレイベントで手稲山を登ってから、キャンバスから見える手稲山が、もう、気にならなくなっている(笑)。あの山に自分が登ったんだという達成感がすごいですね。だからこそ、なるべく若い学生に体験して欲しいと思いますし、今年本番を迎える2020年10月の定例ウォークは、新入生に参加して欲しいと思っています。学生時代にそういう経験ができるれば手稲という地域に対して強烈な思い出が残るはず。ただ、プロジェクトの展開次第ではすごく過酷にもなり得るので、そこは学生たちに意見を聞きつつ、苦行であっても(笑)楽しい経験になる、そういうバランスを探っていくかなと考えています。

20キロのウォークや山登りは、サバイバルの領域かも知れませんが、デジタル世代の学生たちに「自分自身を見つめながら他者と共に生きていくための経験」を、大学生活の中でひとつでも体験して欲しいという、新たな思いも生まれました。

+PIT参加学生Voice



映像制作で参加!
メディアデザイン学科
今村 友香さん



調査企画で参加!
メディアデザイン学科
得能 碧さん

映像制作班としてプレイベントに参加し、登ってくる人たちの表情などを各方面から記録しました。普段は映画など、自分たちが考えたものを映像化することが多いのですが、今回はドキュメンタリー。出演者の皆さんの表情をどう切り取って、見る方に伝えるのか、人と人のつながりを意識した映像になったかなと思います。映像を通して、誰かの背中を押すきっかけになるかも知れない。自分の中に経験として得たことをアウトプットすることで楽しさの輪を広げていきたいです。

このイベントの動画を本学YouTubeチャンネルからご覧いただけます。
<https://www.youtube.com/user/PlusProfessional>



今後の展望。



メディアデザイン学科としては、学生たちが山登りをする際にLEDライトなどを持つてもらい、それで手稲の山を照らすメディアアートができるのかという構想があります。さらにゆくゆくは、総合大学である本学の強みを生かして、「歩く」という人間にとて基本的なことをベースに、観光、教育研究、防災、健康…といったいろいろな要素を総合的に考えられるイベントに成長すればすごく良いなと思っています。今後のイベントなどでは、市民グループの方にもご参加いただくことで、本学ばかりではなく、将来、大学と地域が一体になって「手稲山の日」が浸透すれば、素晴らしいこと。

たくさんの夢が詰まった企画の、今が最初の一歩です。今後どういう展開が良いのか、教員、学生、地域の方や企業の方とも交えて一緒に摸索していきたいと思っています。

Chapter.1

大学を飛び出し、街へ！山へ！ 北科大生の新たな秋の風物詩 「手稲山の日・定例ウォーク」の実現に向けて。

北海道科学大学は手稲区唯一の大学であり、また、キャンパスの目の前にある手稲山は大変シンボリックな存在です。しかし、学生たちの多くはキャンパス内だけで活動しており、地域は散策せず、手稲山にも登ったことがありません。学生たちと実際に街を歩き、地域の魅力や課題について考えたい、そんな思いがそもそもその発端でした。

プロジェクト名には「観光」と入れました。手稲山や前田森林公园といった手稲区を代表する名所を観光という視点で捉えるとどのようなことが再認識されるのか。また、国内外には大学キャンパスがその都市を代表する観光地になっている事例が多くありますが、本学で構想する場合に今後どのような創造性が必要なのか。あるいは手稲の主だったスポットをつなぐ歩くルートや歩く速度での体験を創造することによって、私たち大学関係者自身が地域の潜在的な資源を体感し、地域への愛着を深めて、何らかの創造的なコンテンツとして表現し、地域や他者に伝え得るのか、ということからです。さらに「歩く」ことに関しては運動不足解消はもちろん、アウトドアアクティビティやスポーツとしての側面もあり、おしゃべりしながら、写真を撮りながら…といった“○○しながら歩けること”が、地域の新たな魅力を知る速度と考えたのがプロジェクト名の由来です。

これらのことから、①手稲の観光スポットと本学を結ぶ観光ルートの開発、②ルートを利用した定例ウォークなどの教育プログラムの考案と実施、③ルートにある観光資源を抽出しプロモーションコンテンツを制作すること、を目的に、プロジェクトをスタートさせました。



▲2019年10月開催のプレイベントの様子。

プロジェクトの流れ

- 2019年 1月 +PIT採用、活動開始
- 2019年 2月 調査～雪中を歩く編～
- 2019年 5月 調査～新緑を歩く編～
- 2019年10月 プレイイベント
「HUSpectacle -手稲行列-」実施
- 2020年 2月 フォーラム開催(撮影コンテンツの披露)
- 2020年 4月 第2期の調査開始
- 2020年7-8月 「HUSpectacle -手稲行列-」
ライト制作ワークショップ
(メディアアートの一環)
- 2020年10月 手稲山の日・定例ウォーク
「HUSpectacle -手稲行列-」
第1回開催



学 校法人北海道科学大学と株式会社北海道新聞社は、北海道の発展のためにさまざまな面で連携を図ることを目的に、2019年8月、包括連携協定を締結しました。これを記念し、2019年9月21日(土)、道新ホールにおいて「北海道科学大学・北海道新聞社包括連携協定記念フォーラム 胆振東部地震1年『防災・減災はじめの一歩』」を開催しました。

当日は地震学を専門とする慶應義塾大学環境情報学部の大木聖子准教授を招いた基調講演をはじめ、地震で甚大な被害を受けた被災地の行政トップ、専門家、現地で取材をし続ける記者を交えてのパネルディスカッションを実施しました。会場には、札幌市民の方など約450名の方にご来場いただきました。みなさんのご家庭でも改めて「我が家家の防災・減災」考えてみませんか?



オープニング

13時30分、北海道科学大学高等学校合唱部による美しい歌声でフォーラムがスタートしました。はじめに、主催者を代表し、苦米地司理事長よりご挨拶がありました。北海道科学大学では、開学当初から積雪寒冷地に関する研究に取り組んでおり、その一端をスライドとともに解説。また、2018年に起きた胆振東部地震時の本学の取り組みを紹介しました。本学は、北海道とともに歩んできた95年という歴史の中で、いつもキャンパスのどこかで北海道の安全・安心を支える研究が行われています。これらの活動を通して、今後も北海道の発展に寄与できる教育研究を進めていきたいと考えています。



▲ 苦米地理事長よりご挨拶。

▲ 大学の取り組みをスライドで紹介。

北海道科学大学の防災に関する取り組み

フォーラム当日、会場ロビーでは、胆振東部地震発生後の本学の活動報告を行いました。また、災害時に役立つ研究事例として、車いすを装着して階段を下降できる「車いす用階段避難車(チエアキャリダン)」や、立ち座りがしやすい「避難所用段ボールベッド」に関する説明パネルを設置しました。チエアキャリダンと段ボールベッドは実物も展示し、参加者の方に実際に見て触れていただきました。



本学の震災時の対応や、チエアキャリダンの誕生背景については、ニュースレターのバックナンバー(Vol.36 2018 NO.3)で紹介。QRコードまたは下記URLからご覧ください。

▶ <https://www.hus.ac.jp/info/magazine/ondemand.html>



基調講演「人を育む・未来を創る～防災を通した教育～」



講師 大木 聖子 氏 慶應義塾大学 環境情報学部 准教授

2001年 北海道大学理学部惑星科学科を卒業
2006年 東京大学大学院理学系研究科にて博士号を取得
2008年4月 東京大学地震研究所助教、2013年4月より現職

大木先生は、高校1年生の頃に起こった阪神・淡路大震災をきっかけに地震学を志し、2001年、北海道大学理学部地球惑星科学科を卒業されました。今回の講演は「私の地震学を育てくれた、北海道への恩返しも込めて」という思いがあったと言います。

講演の中で特に関心を集めていたのが高知県の中学校で取り組まれた「防災小説」についてです。防災小説とは、先生が生徒に対し、未来に起こるかもしれない地震の発生日時と天候を指定。生徒は巨大地震にあったと想定し、その時どう思うか、何か感じるか、家族は何をしているなどを想像して800字の文章にまとめるというもの。そして大事な条件は、物語は必ず希望を持って終えること。防災小説を通して、生徒たちはイメージの中で被災を一度経験します。そのイメージが強いほど「被災していない今がどれほどありがたいかを知り、そして今この時間、何をすべきなのかが分かります。その経験は人間教育にもつながります」と大木先生。「良い防災は“今”を豊かにします」と、力強く語る大木先生の言葉や思いが多くの方の心に響いていました。

講演内容

地震の科学 / 胆振東部の地震について
千島列島での超巨大地震 / 防災小説 他



パネルディスカッション

基調講演後のパネルディスカッションでは、厚真町長 宮坂尚市朗氏、大木聖子氏、北海道新聞記者 岩崎あんり氏、本学から、建築学科の福島明教授、看護学科の久賀久美子准教授がパネリストとして参加し、意見を交換しました。また、コーディネーターを気象予報士の菅井貴子氏が務めました。



厚真町長
宮坂尚市朗 氏

宮坂町長からは、胆振東部地震の災害の大きさを具体的なスライドや数字でご説明いただきました。「発災して体験した人が人と人のつながりの深さ。お互いに顔を合わせて話せる環境が、防災や減災につながる。地域のつながりが強い町ではありますが、しっかりとした組織、いち早い安否確認ができる体制を整えていきたい。」



慶應義塾大学 環境情報学部 准教授
大木聖子 氏

基調講演を行った大木先生。「胆振東部の地震も、それ以外の地域の震災も、自分たちが報道で知る以上の大変な思いが現場にある。現地で何が起きているのかを想像することが大事。いつか震災が起らうるんだとアリティを持って想像する、意識を高めることが、防災・減災のはじめの一歩になると思います。」



北海道新聞記者
岩崎あんり 氏

発災後すぐに現地に赴き取材を続けながら、北海道新聞でコラムを連載している岩崎氏。「大変な状況の中、町民の方は丁寧に話をしてくれました。ひとつの災害で、人々の暮らしが、日常の当たり前が一変してしまいます。私たちメディアに何ができるのか、これからも被災地を追いかながら、状況を伝えることで災害の風化を防いでいきたい。」



北海道科学大学 保健医療学部 看護学科
久賀久美子 准教授

看護の観点から意見を述べた久賀先生。「「基幹避難所に指定されている本学の体育館以外で、どんな場所が役立つかをまとめた、大学内のライフラインマップを現在制作しています。図書館の個室スペースを集団生活が難しい人のために解放したり、薬学部や保健医療学部がある建物は医療機器が備えられているので、介護者のための福祉スペースとして利用が可能です。」



北海道科学大学 工学部 建築学科
福島明 教授

施設環境の専門家として意見を述べた福島先生。「既存住宅の耐震・断熱化に取り組んでいるものなかなか進まない。外装工事をする際に50万円ほど追加すれば、最新の住宅と変わらない耐震・断熱性が得られます。建物がつぶれないこと、寒さがしのげること、そういう住宅が街の中にいくつあることで、震災が起った時に身を寄せることができます。」



コーディネーター 気象予報士・防災士
菅井貴子 氏

気象予報士・防災士としてコーディネーターを務めた菅井氏。「胆振東部地震で北海道は、かつて経験したことのない被害に見舞われました。しかし、その経験を風化させることなく、防災・減災を知り学ぶことで、新たな一步につなげることの大切さを改めて認識する機会となりました。」

会場内に響く盛大な拍手で、フォーラムは締めくられました。

フォーラムに 参加した 市民の声

防災小説の話や、厚真町の震災後のスライド写真などが印象に残っています。専門家の先生から、震災についてこんなに詳しく聞ける機会がなかったので、すごく良かったです。

新聞を見て今回のフォーラムを知り、ぜひ参加したいと思いました。今まで自分なりに備蓄はしていましたが、近所に避難所があることを初めて知りました。今後に役立てたいです。

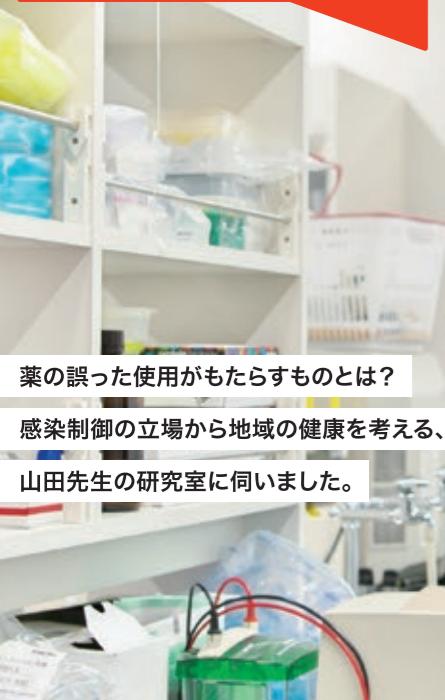
会場を埋めた多くの人々。なかには手帳にびっしりとメモを取る方も。



※役職・所属などはイベント開催時のものです。

研究室から

先生の研究を
のぞいてみよう!



薬の誤った使用がもたらすものとは?

感染制御の立場から地域の健康を考える、

山田先生の研究室に伺いました。

“抗菌薬の適正使用と、
副作用の軽減を
目指して。”

薬学部 薬学科
やまだ たけひろ
山田 武宏 教授

風 邪をひいたので病院に行き、抗菌薬(抗生素質)を出してもらった。一見、よくあるシーンのように思えますが、実は、風邪のほとんどはウイルスが原因とされており、抗菌薬はウイルスに効きません。薬の誤った認識が薬剤耐性菌を増やしてしまう原因になります。

不要な抗菌薬が使われることで、薬剤耐性菌が増えます。薬剤耐性菌が増えると抗菌薬の効きが悪くなったり、免疫の低下した方では感染症を発症しやすくなる、感染症が重症化してしまうというリスクが高まります。世の中に耐性菌が増える…、この状態を放っておくとどうなるのでしょうか?今、世界的に見ても耐性菌が増えていながら、抗菌薬の新薬の開発は進んでおらず、将来的には薬剤耐性菌で亡くなる方が、がんで亡くなる方を上回るとの予測もされています*。新しい薬がなかなか出でこないのであれば、「今ある薬をちゃんと使うこと」がより重要です。



細胞を使った実験で、どうして副作用ができるのかを解明。

これまで約15年間、大学病院で「抗菌薬の適正使用を推進すること(Antimicrobial Stewardship)」に薬剤師として取り組み、そして「その結果、どのような効果が得られるかを検証すること」を臨床研究として取り組んできました。例えば、菌による感染症の患者さんに対して、どういう菌が原因になっているかを調べると、それに効きそうな抗菌薬が検査(薬剤感受性検査といいます)でわかります。その際、薬剤感受性検査に基づいて、正しく効く薬は何なのか、またその投与量はどうなのか、その患者さんが

一緒に服用している薬との相互作用はないか、などを助言すると、治療成績が上がるという結果を得てきました。そのような治療効果の解析を行う臨床での研究を、感染症専門の医師と検査技師、看護師、薬剤師からなるチーム(抗菌薬適正使用支援チーム)による活動の中で携わってきました。2019年春に大学病院を離れ、共同研究を北科大で引き続き実施しています。

*Resistance: Tackling a crisis for the health and wealth of nations. The Review on Antimicrobial Resistance Chaired by Jim O'Neill (December 2014)



ゼミ生とディスカッション。薬学部4年の高田慎吾さんと。

卒業生訪問

先輩の大学時代と
これから聞く
卒業生インタビュー

File.3

ニプロ株式会社
企画開発技術事業部
国内商品開発・技術営業本部
医療器械開発・技術営業部 一課 主任
永井 翔 氏



PROFILE

琴似工業高校出身。2010年 医療福祉工学科(現:臨床工学科)卒業後、本学の大学院(医療工学専攻)に進学し、ニプロ株式会社に就職。現在は大阪を拠点に、半年間は国内・海外出張で飛び回る毎日。今回は、大学時代の恩師・木村主幸教授の最終講義を聽講するために来学。卒後10年以上経っても、色褪せない恩師との縁がありました。

現在のお仕事について

ニプロ株式会社では、さまざまな医療機器や医薬品などを取り扱っていますが、その中でも透析に関する業務が多くを占めており、透析に使用するダイアライザは日本で1位のシェアを占めています。そこで私は、透析装置をイチから開発する仕事を担当しています。技術営業部に所属していて、タッチパネルの操作性の向上など技術面はもちろん、装置の紹介やプレゼン、PR活動など幅広い業務に携っています。



▲ 恩師の木村教授と。

恩師との出会い

木村先生との最初の思い出は“赤点”でした(笑)。1年生の1番最初に、木村先生の「解剖生理学」のテストがあり、それがまさかの赤点で“難しい問題を出す先生だな…”と勝手に苦手意識を持っていたが(笑)、それが逆に自分を奮起するきっかけになりました。もともと興味のあった人体の話は面白かったですし、微生物という先生の専門分野にもどんどん惹かれていました。結局、ゼミでも大学院でもお世話になりました。先生の話術やプレゼン術にも影響を受け、今、私の課ではプレゼンというと自分に声を掛けてもらうことが多く、これも木村先生のおかげだと思っています。



▲ 木村教授と永井さんご家族。
節目ごとに再会を楽しんでいるそう。

病院ではなく、メーカーの道へ

大学4年の臨床実習で、実際の現場で装置に触れた時に「あれ?この装置ってこうなっているんだ。それなら、こうした方が使いやすいのにな」と気づいたことが、大きなきっかけになりました。病院に勤務して直接患者さんを診るのも貢献の

▲ 後輩の育成用にニプロの透析装置を4台寄贈。

型にはまらない欲に。
自分の世界を、自分で作り出そう!



学生時代にタイムスリップ!



「テストに向けてみんなで集まったことも楽しかったし、終わったら終わったで、そのまま朝までにカラオケに行ったりと、メリハリのある大学時代でした」と永井さん。

学科だより



今回は、**機械工学科** **都市環境学科** **義肢装具学科** **看護学科** **自動車工学科** の5学科を紹介！

工学部 機械工学科

学生有志が「ものづくり協力隊」を結成！ 地域の方に、ものづくりの楽しさを伝えます。

機械工学科では「ものづくり」を基点に機械設計者を養成するカリキュラムを実施しています。入学初年度から機械加工実習を、2年次では3DCAD及び3Dプリンタを用いた授業を取り入れ、学生のモノづくりの素養を実践的に伸ばす授業を行っています。学生たちが培っている技能を活かすべく学生有志による組織「ものづくり協力隊」を結成し、2019年9月28日(土)・29日(日)に行われた大学祭において学科展示を行いました。

展示では、1年次の前期科目・フレッシュマンセミナーで作製した、風の力を利用して走る「ウインドカー」と温度差による発電によって走る「ペルチェカー」の両展示や、卒業研究の過程で得た知識を利用した6足ロボット(蟹型ロボット、エビ型ロボット)の操作体験展示、3DCADで設計を行い3Dプリンタで製造したプラモデルの製作体験会を行いました。イベントは非常に盛況で、両日合わせて400名近くの来場者が訪れました。さらにこの経験を活かし、2020年2月下旬には近隣のショッピングモールにおいて学科単独のモノづくりイベントを行う予定です。



▲大学祭の学科展示には多くの来場者が訪れました！

工学部 都市環境学科

国家試験の中でも最高峰の資格、「技術士1次試験」に9名が合格！

令和元年度技術士(建設部門)1次試験に都市環境学科から9名が合格しました。今回見事合格したのは、3年生4名、4年生5名の計9名。全国の合格率が47.6%と難しい試験の中、本学科は64.2%と大健闘しました。合格者の多くは、今年度より実施した「都市環境学科 技術士合格塾」の参加者でした。これは、井田准教授の発案・実施による技術士受験サポートプログラムで、5月から毎週コツコツと積み上げてきた成果と言えます。



▲新任の佐藤健斗助教

義肢装具学科に新任の佐藤健斗助教が着任。 北科大で学び、母校の教員へ。

2019年10月に入職した佐藤健斗と申します。以前は帯広市を中心に道東方面で義足や装具を提供する「義肢装具士」として約9年間活動していました。手稲区で過ごすのは大学生だった10年前以来、2度目です。以前はなかったお店ができて様変わりした町の様子に驚いたり、以前と変わらない様子を懐かしんだりしています。仕事の面ではこれまでとはがらりと内容が変わるので、バタつく場面は多々ありますが、生活するにあたって、この手稲区は勝手のわかる地域なので大変過ごしやすいです。

私の研究・活動のテーマは、大きな枠で言うと「義手・義足や装具をいかに使ってもらうか」です。私たち義肢装具士が提供するものは、ただそのあたりに置いておいたり、飾っておいたりして役に立つものではなく、身につけてもらって初めて効果のあるものです。義足や装具を使ってもらうまでにある使用者の心理的なハードルや、社会環境が作るハードルを低くするために頑張っていきたいです。

保健医療学部 看護学科

実習を通して学ぶ、新鮮な驚きと感動。 実践力と看護師としての思考力を磨きます。

看護学科2年生は、高齢者を知り看護することを目的に「老年看護学実習」で実習を行います。そこでは、療養生活を送る高齢者一人を学生一人が受け持たせていただき、実際にどのような看護が行われているのかを見学します。

高齢者の中には、認知症や脳卒中の後遺症のために言葉で上手にコミュニケーションがとれない方もいらっしゃいますが、学生は自分の技術を駆使して一生懸命に高齢者との関わりを持ちます。2週間の実習が終わる頃には、担当した方から「明日からこないの？さみしくなる」など声をかけていただき、涙する学生がいるほどです。

この実習で大切なことは、実際に実行されている看護を見学したうえで「その看護はなぜ必要なのか？」を考えること。そのためには身体機能や認知機能はもちろん、疾病や薬理など今まで学んできた知識が必要です。学生はそれらの知識を総動員して、その疑問を明らかにしようと取り組んでいます。

「老年看護学実習」のもうひとつの目的は、高齢者の生活を支える施設や福祉機器を学ぶこと。日本は今後ますます高齢者が増え、慢性疾患や認知症を抱える方が増えると予想されています。高齢者が自分でできることを少しでも長く続けられるように、施設や機器がどのように活用されているのかを知り、その中で看護が果たす役割を考えます。

実習では、実際に看護師が果たしている役割を見て・聞いて・感じることができます。百聞は一見に如かずという言葉のとおり、この実習体験は学生にとって新鮮な驚きや感動があり、深く学ぶ機会となっています。



▲今、この場面に必要なのは「手を差し伸べること」「見守ること」。その方にとってベストな看護支援を考えます。

短期大学部 自動車工学科

「札幌モーターショー2020」に出展！ 200組以上の親子が来場、自動車の魅力を伝えました。



▲実際に見て触れて、自動車の世界を体験！

1月17日(金)・18日(日)札幌ドームにて開催された北日本最大規模の自動車関連イベント「札幌モーターショー2020」に、自動車工学科が 出展しました。

北海道自動車産業ゾーンでは、自動車工学科2年生がレストアをしたフォーミュラカーを展示しました。この車両は、短期大学部として初めて全国大会への出場を果たした2011年開催の「第9回全日本学生フォーミュラ大会」で、Fuel Economy Award(省エネ賞)第1位を獲得した作品です。次年度以降、EVでの参戦に向けた本学の取り組みをPRしました。

モーターコミュニケーションパークでは、「北海道科学大学まちかどキャンパス in SMS2020」を開催しました。自動車の仕組みを学ぶためのワークショップでは、小型エンジンの分解・組立体験や、ブロックで組み立てた電動車を使った実験を通して、ギヤとタイヤの違いによる走りの差を紹介しました。ものづくり体験では、粘土で作った型に温めたプラスチック板をのせ、真空成型によるプラスチック加工体験や、北海道札幌琴似工業高校協力により金属折鶴を作る板金加工体験などを実施しました。またブース内では、エンジンやトランスマミッションのカットモデルや模型、ポスターなど自動車の仕組みが学べる教材展示を併せて行いました。200組以上の親子に参加いただき、子どもたちに自動車やものづくりの魅力を伝えました。

活躍する学生たち

弓道部

しゃー!



冬に引ける大学はうちだけ!
初心者も経験者も大歓迎!

DATA

〈部長〉 鐘ヶ江 瑞星さん(情報工学科2年)
〈所属人数〉 男子24名、女子8名
〈戦績〉 全道・全国常連校

静寂な射場に聞こえる、キリキリキリと引く弓の音。一瞬の間を置き、ビュンッと放たれる矢。

ひとつひとつの所作も美しい日本武芸のひとつ・弓道。

弓道とは、28m離れた直径36cmの的を狙う競技で、

本学の弓道部は男女共にI部リーグに所属し、強豪校として知られています。

ちなみに大会で、仲間の矢が的にあたると「しゃー!」と声掛けして選手を鼓舞するのだそう。



▲取材に訪れた1月某日。室内弓道場とはいっても外は氷点下の冷え込み!しかし部員たちは寒さをものともせず弓を引きます。

今年の目標は、全道大会優勝。全員で目指せ、王座決定戦!!

\ 部長の鐘ヶ江さんに伺いました! /

弓道部では月・水・金・土の週4回、平日は16:30~18:30、休日は10:00~12:00を正規練習として活動しています。体育館に併設された屋外弓道場のほかに、部室横に室内弓道場があり、正規練習以外の自主練や冬場の活動も可能で、練習量の多さが好成績につながっていると思います。新入部員には2年生がいちから基礎を教えるのが弓道部の伝統。努力次第で、初心者の人でも3年生、4年生の頃には十分戦力として成長できますよ!

弓道部の目標は、毎年10月に開催される「全道学生弓道争覇戦」での優勝で、争覇戦に優勝すると、王座決定戦という全国大会への切符を手にすることができます。弓道部員なら誰しもが目指すこの大会で、今年は優勝を目指します!!少しでも弓道に興味のある方は、ぜひ見学に来てください。そして僕たちと一緒に勝ちましょう!!

弓道部に入部すると…

姿勢が良くなる!
(猫背解消!)

礼儀作法が身につく!

大会後はみんなで打ち上げ!
ボウリングやカラオケにGO!

ダーツが少しうまくなる…かも!



イベント報告

✨HUSキャンパス・イルミネーション2019✨

2019年12月2日(月)~25日(水)の期間、今年で3回目となるHUSキャンパス・イルミネーションを開催しました。

12月2日(月)17時から、本学中央棟(E棟)において点灯式を行いました。はじめに北海道科学大学高等学校合唱部による校歌が披露され、続いて渡辺泰裕学長と田中俊成手稻区長から挨拶がありました。3名の学生によりイルミネーション点灯のスイッチが押されると、ステンドグラスアーティストのMie氏(本学客員教授)がデザインした高さ6mのツリーと高さ2.4mのオブジェ14基に明かりが灯されました。また今年は初の試みとして、日本を代表する万華鏡作家の依田満・百合子夫妻が手掛ける投影型万華鏡が校舎に投影され、辺りは幻想的な雰囲気に包まれました。その後、北海道科学大学YOSAKOIソーラン部による演舞、Mie氏と依田夫妻による作品解説、北海道科学大学合唱部によるクリスマスソングが披露され、会場は大いに盛り上がりいました。

点灯式に先立ち、11月23日(土・祝)にガラスのキャンドルホルダー作りワークショップ、12月1日(日)に手作り万華鏡ワークショップを、地域の小学生を対象に実施しました。どちらもすぐに定員に達する盛況ぶりで、ワークショップで作成したキャンドルホルダーは、イルミネーション期間中、中央棟ホールに展示されました。

また、イルミネーション期間中は中央棟ホールを会場に、Mie氏と依田夫妻の作品を楽しめる「光のアート展」、本学学生のクラブ発表や作品展示、札幌国際情報高校吹奏楽部のダンプレ(Dancing & Playing)、メディアデザイン学科学生が制作したインタラクティブコンテンツの投影及びショートフィルム上映、PMF修了生を中心とした歌と弦楽カルテットによるクリスマスコンサートとさまざまなイベントが行われ、延べ800名を超える方にご来場いただきました。



期間中、さまざまなイベントを開催しました!



11/23(土・祝)
ガラスの
キャンドルホルダー
作りワークショップ



12/1(日)
手作り万華鏡
ワークショップ



12/2(月)
点灯式



12/3(火)~25(水)
光のアート展



12/6(金)
ダンスサークル
Force
クラブ学生
パフォーマンス



12/10(火)~18(水)
クラブ学生
作品展示



12/18(水)~25(水)
夢プロジェクト
e²club presents
展示



12/20(金)
札幌国際情報高校
吹奏楽部
クリスマスダンプレゼント
from SITBAND



12/25(水)
PMF
札幌オペラカルテット
クリスマス・コンサート